

儼然寧樂二聖社
 神は和光市老屋
 林杉鬱鬱 二千年老
 舞者高邊麿素親

宗妙千載古皇妙
 當日繁華一何處
 春嶺花葉秋野底
 凄涼節物富閑幽

●書の解説

寧樂百種14首の帖作品（1首と2首を掲載）

2013年度日展第5科書部門初入選作品です。作品は16帖からなり、表紙帖は積文が添付され、最終帖には落款が書かれています。寧樂百種は幕末の一条院宮坊官であり、かつ興福寺三綱の職にあった二條澹齋が古都奈良を読まれた詩であります。何故本詩を選んだかと言えば我が師故今井凌雪先生が発想され、一門の雪心会幹部が読み・解説を行い会員の為に編纂した詩集であった。亡き師の面影を思い浮かべて本詩を選びました。第1種は南都という題である。ものさびれた千年も経た天皇の居られた古い町を切々と読まれたものさびしい詩である。第2種は春日社という題である。おごそかな奈良第一の神社である春日大社が鬱蒼と茂る杉木立の中、粛々と読まれた詩である。私の書道歴は小学校低学年で近所の書道塾から始めて高校・大学・会社を含め現在まで60年を超える長きに渡って続けられたことが誇りであります。故今井凌雪先生に師事したのは会社に入社した時である。以来何度も展覧会に出品できない時もありましたが、細く長く続けられたことが68歳にして日展初入選という栄誉に浴しました。昨年11月、内覧会に参加しました。5科書は1万点を超える出品者で1000名を下回る入選者であったとのこと。私の作品づくりの古典は中国明・清時代の書家である呉昌碩です。呉昌碩は篆刻・書・画・詩を得意とする文人であり、独特の力強い線質に魅かれて長年取り組んでいます。その実が帖作品で花開いたことに喜びを感じています。今回は、工業会報担当の辻教授よりお話を頂き、工業会報表紙に掲載したいとのこと、喜んで賛同させて頂きました。私は今、工業会近畿支部連合会の会長と兵庫支部機械系の副支部長を拝命しています。我々工業会としては、産学官連携の橋渡し役として、大学改革への協力を続けて参りたいと思っています。（機械43年卒 原田新一）

●表紙解説

作品タイトル 「歓喜・動と静」

徳島県の誇り阿波踊りを絵にしました。
 踊り手の皆さんの歓喜の様子を「動と静」として表現しました。
 毎年大阪天王寺の市立美術館にて開催されるミレー友好協会日本支局のミレー展にて優秀賞をいただいたもので、徳島県に寄贈し男女共同参画センターに展示し皆様にご高覧いただいている作品です。
 また、日本美術評論家大賞をいただき次の評論をいただきました。

“気合い掛かった歓びのリアリズム”

世界的に有名となった徳島の阿波踊りは、いまやそのリズムやテンポ、普遍的な振り付けの親しみ易さが受けて各地に広がっていて、益ともなると賑やかである。「踊る阿保に見る阿保…」の歌詞に合わせて笛や鉦、太鼓や三味線の囃子の合奏も気合いが掛かり、思わず自分も動意づいてしまう。この作品を拝見しただけでもつい調子づいてしまうほどで、作家の筆致の鮮やかさに吸い込まれる。動と静の絶妙なリズムの歓喜を実によく描いた。

文/長谷川 栄
 （機械33年卒 岡田宏昭）